

まつおか たかし
松岡 敬



同志社大学学長

村田晃嗣前学長の任期満了に伴い、4月1日付で松岡敬理工学部教授が第33代学長に就任した。任期は2020年3月31日までの4年間。

新学長は1955年奈良県桜井市生まれ。1979年同志社大学工学部を卒業、1981年同志社大学院工学研究科博士前期課程を修了、1984年同志社大学院工学研究科博士後期課程を単位取得退学。1987年工学博士の学位を取得（同志社大学）。1984年近畿大学

工学部助手に着任。その後、1993年に同志社大学工学部（現理工学部）助教授に着任し、1998年教授に就任。以後、同大学理工学部長、副学長、大学評議員、脳科学研究科長などを歴任した。

研究分野は設計工学・機械機能要素・トライボロジー領域、複合材料（金属材料を含む）・表面工学領域。

同志社大学では、教育理念である「キリスト教主義・自由主義・国際主義」に基づいた「良心教育」を継承し、「各自の自発性を促し、個々の学びに導く」という体制と環境が整っている。教育と研究のグローバル化の体制を再構築し、次代に向けたさまざまな実践教育プログラムを新設するなど、新たな学びの環境づくりに全力を傾注しており、学生や教職員の力を結集して「ALL DOSSHISHA」での大学運営を目指す。

しおさき ちえこ
塩崎 千枝子



松山東雲女子大学・松山東雲短期大学学長

棟方信彦前学長の任期満了に伴い、4月1日付で塩崎千枝子が学長に就任した。

塩崎学長は、1951年山梨県生まれ。1975年東京大学教養学部教養学科を卒業。1981年ハーバード大学教育学大学院修士課程卒業。放送教育開発センター助手、松山東雲短期大学助教授を経て1992年松山東雲女子大学助教授、1996年同教授に就任。2007年に

同大学の学長代行を務める。この間、大学および新学科の設置に携わるとともに、大学開放事業や学内の保育室開設など、開かれた大学づくりの一翼を担ってきた。教務部長、松山東雲エクステンションセンター長、学

科長、松山東雲学園理事などを歴任。専門は生涯教育、社会教育。女性や地域の青少年育成、家庭支援などを主テーマに教育研究活動を行っており、共著『生涯学習』などがある。本学は、四国最初の女学校として130年前に創立された学園の伝統の下、キリスト教精神に基づく教育を実践して25年目を迎える。

「世の鑑」となって活躍できる女性の育成へ、教育力の一層の向上と、学生、教職員ともに育ちあう豊かな教育環境づくりを目指し、全学的な取り組みを続けている。小規模ながら良質な女子教育を本学の変わりぬきたいと思う。

土屋 恵一郎



明治大学学長

福宮賢一前学長の任期満了に伴い、4月1日付で土屋恵一郎教授が学長に就任した。

土屋新学長は1946年東京都生まれ。1970年明治大学法学部卒業、1977年同大学院法学研究科博士課程単位取得退学後、1978年同大学法学部専任教員となり、現在に至っている。同大学においては、法学部長、国家試験指導センター所長、教務担当常勤理事等を歴任している。

専門分野は法哲学、近代イギリス思想史。主な著書として、『独身者の思想史』（岩波書店、1993）、『ベトナムという男』（青土社、1993）、改題刊行『怪物ベトナム』講談社学術文庫、2012）、『正義論／自由論』（岩波現代文庫、1996）が挙げられる。

趣味は、能観劇、古典音楽鑑賞（洋の東西を問わず）、ゴルフなど。

能に関して、1990年「能現在の芸術のために」で芸術選奨新人賞を受賞。2014年からは一般財団法人観世文庫の理事を務める。また、海外でも学術文化領域の交流発展・促進への尽力が認められ、2010年に中国・北京大学外国語学院日本文化研究所特別顧問に就任した。研究者共同体としての大学の姿を原点に、強力なリーダーシップで、本年創立135年を迎えた明治大学を担い、私学としての独自性を創造していくであろう。

植木 實



大阪医科薬科大学理事

学校法人大阪医科薬科大学は、大阪医科薬科大学と大阪薬科大学の法人合併により2016年4月1日に誕生

し、大阪医科大学、大阪薬科大学、高槻中学校・高等学校を有する医療系総合大学・中等学園に成長した。新法人の理事長には植木實（前学校法人大阪医科薬科大学理事長）が、副理事長には濱岡純治（前学校法人大阪薬科大学理事長）が就任した。植木理事長は1968年大阪医科薬科大学大学院医学研究科修了（医学博

士）。1971年大阪医科大学講師（産婦人科学）、助教授を経て、1995年教授就任。2000年病院院長、2005年学長、2010年から学校法人大阪医科薬科大学理事長を務めた。

研究分野は産婦人科学で「婦人科腫瘍学」を専門とし、日本産科婦人科学会、日本臨床細胞学会、日本婦人科腫瘍学会等各種学会の名譽会員である。2003年から厚生労働省医師国家試験作成委員会委員を6年間務めた。1990年に日本臨床細胞学会賞受賞。趣味は囲碁、「人皆我師也」を信条とする。

本法人は、我が国の社会情勢の変化を見据え、次世代を担う人間性豊かな良質な医療人の養成ならびに医学・薬学・看護学が連携する先進的医療体制の構築・提供を目指し、加えて中等教育でグローバル人材を育成するなど、魅力ある学校づくりを行い、特色ある医療系総合大学・中等学園への発展を目指している。

戸部 順一



成城大学学長

油井雄二前学長の任期満了に伴い、4月1日付で戸部順一文芸学部教授が新学長に就任した。

戸部新学長は1951年、神奈川県で生まれる。1975年に東京大学文学部を卒業後、東京大学大学院人文科学研究科修士課程に入学し、1983年に同博士課程を単位取得退学。1994年、成城大学文芸学部に助教として着任。2001年から文芸学部教授。2004～08年および2012～16年に文芸学部長

を務める。

専門は西洋古典学。本人の語るところでは、「木を見て森を見ず」的な研究を続けて来たが、研究の蓄積ゆえか、最近になってようやく森の姿がおぼろげながら見えてきたらしく、研究成果の公表が待たれる。

成城学園が2017年に創立100周年を迎えるにあたり、現在、大学・大学院はさまざまな教育改革に取り組んでいる。学長としては、国際教育、キャリア教育、教養教育の「実のある深化」を企画しているとのこと。「懸命になること、また懸命になったことにより得られる充実感や学生の皆さんに体験してもらおう」を諸改革の共通コンセプトにしたいと抱負を述べているが、「笑いを通してギリシア人を理解する」を研究目標としてきたから、だるうか、困った顔も見せず、いつもにこやかにをモットーとして業務に励む考えのようである。

北川 浩



成蹊大学学長

亀嶋庸一前学長の任期満了に伴い、4月1日付で経済学部北川浩教授が学長に就任した。任期は4年。

北川新学長は1960年山口県生まれ。1984年一橋大学卒業後、1989年同大学院経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学。同年成蹊大学経済学部専任講師に就任、助教を経て、1999年に同学部教授。学長補佐、キャリア支援センター所長、経済学部長を歴任し、現在に至る。キャリア支援センター

所長時代には、インターンシップの運営拡充のため、準備講座および事後指導の方法を確立し、同授業を全学に拡張させた。また、2013年には独自の産学連携プログラム「丸の内ビジネス研修(MBT)」を企画し、多くの企業との交渉によって正課授業としての枠組みを構築した。

専門分野は貨幣論、金融論、人材開発論。主著には「経済のしくみと制度」、『マクロ経済理論入門』がある。成蹊大学は、学生一人一人と向き合い、それぞれが持つ個性を発見し育む「個性尊重の人間教育」を創立以来の伝統とし、少人数教育によるきめ細かな指導を実践している。新学長は、基本方針として「未知のものに主体的・積極的にチャレンジする『自奮自発』の精神の涵養(人材育成)」、「創造性豊かな組織的活力の再生(組織運営)」、「元氣な学生による元氣な大学づくり(メインコンセプト)」を掲げる。

木越 康



大谷大学長

草野顕之前学長の任期満了に伴い、4月1日付で木越康教授が第28代学長に就任した。任期は2020年3月31日までである。

木越新学長は1963年米国カリフォルニア州生まれ。大谷大学院博士後期課程を満期退学後、私学研修福祉会国内研修員（研修地・東京大学文学部宗教学科）などを経て大谷大学に着任し、今日に至る。この間、学生部長などの要職を歴任し、2014年4月から教育・学生支援

担当副学長兼文学部部長を務めた。

研究テーマは「親鸞思想と現代社会」であり、西欧的近代思想との関わりや、キリスト教神学者との対話研究などを通して、宗教の現代的・社会的意味の検証と親鸞思想の現代的意義を分かりやすく論じている。編著書は『「正像末和讃」を読む』『仏教とキリスト教の対話』など。

大谷大学は仏教精神を建学の理念とするが、新学長は、自らの研究に根ざし、先学によって語られた建学の理念を指し示す言葉を現代の分かりやすい言葉に変換し、内外に熱く語りかけようとしている。

誠実で気さくな人柄で、人々を引き付ける魅力があり、何にもまして指導力・行動力に秀でる。東日本大震災発生後、学生・教職員有志を募り、その中心となって今も支援活動を続けている。またバスケットボール部OBとして顧問を務め、体育館で汗を流すこともある。

高橋 裕子



津田塾大学学長

國枝マリ前学長の退任に伴い、2016年4月1日付で就任。

新学長は津田塾大学文学部英文学科を卒業後、カンザス大学大学院教育学研究科博士課程にて学位を取得した。桜美林大学の専任講師、助教授を経て、1997年に津田塾大学文学部英文学科に着任。2004年に教授となり、現在に至る。学内においては、学長補佐、津田梅子資料室長などの要職を歴任。学外では、アメリカ学芸会常務理事、ジェ

ンダー史学会副代表理事など、多数の役職を務めている。

専門はジェンダー史、教育史、家族史と多岐にわたるが、とりわけ津田塾大学の創立者津田梅子の研究に造詣が深く、その集大成である『津田梅子の社会史』は高く評価され、アメリカ学会より清水博賞を受賞した。女性の高等教育に深い知見をもつ

新学長は、日本の女子大学のあり方について二つのことを重視する。良き伝統と新しい未来との発展的接合、および世界の躍進する女子大学の動向を踏まえたグローバルな視点に立つこと。学生には、「大学で学んだアカデミックな基礎力や課題解決力」により「新しい道を切り拓いてほしい」と熱く語る。他者の多様な意見に耳を傾けながらも、つねに大局的な視点を見失わず、一つの実効性ある方向を見いだすために最善を尽くす新学長は、国際性豊かな「21世紀のリーダー」だ。

野口 光一



兵庫医科大学学長

2016年4月1日付で、野口光一解剖学神経科学部門主任教授が第10代学長に就任。任期は2020年3月31日までの4年である。

野口光一学長は、1956年大阪府生まれ。1979年京都大学工学部原子核工学科卒業、1983年大阪大学医学部卒業、1989年大阪大学大学院医学研究科修了。医学博士。1991年和歌山県立医科大学助教授、1994年兵庫医科大学教授、2007年同大学教務部長、2

009年同大学理事、2015年同大学入試センター長を歴任。なお、1989年9月から2年間、米国立衛生研究所に留学。

専門は神経解剖学、疼痛学（基礎研究）で、正常および病的な痛みメカニズムを多彩な方法論で調べている。痛み研究に関する学術的貢献により、2012年兵庫県科学賞を受賞。2006年日本疼痛学会会長、2013年日本運動器疼痛学会会長、現在は日本疼痛学会理事および日本運動器疼痛学会理事、国際疼痛学会日本組織委員会委員長を務めている。

兵庫医科大学は開学以来44年を経過、教育、研究、診療の各方面で高い評価を受けるようになっていながら、建学の精神である「社会の福祉への奉仕」「人間への深い愛」「人間への幅広い科学的理解」を持った良医の育成、研究の推進、地域医療への貢献のために、さらなる取り組みを推進したいと考えている。

大日向 雅美



惠泉女学園大学学長

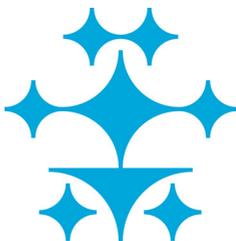
川島堅二前学長の退任に伴い、4月1日付で大日向雅美氏が学長に就任した。任期は4年。

大日向学長はお茶の水女子大学・同大学院修士課程修了、東京都立大学大学院博士課程満期退学。学術博士。専門は発達心理学（親子関係、家族問題、少子化対策、子育て支援）、大学の主な担当科目は「子ども発達」「親子関係学」「ジェンダー論」「心理女性学」である。1970年代初頭のコインロッ

カー・ベビー事件をきっかけに、40年近く母親の育児ストレスや育児不安の研究に取り組む。2003年エイボン教育賞を受賞。惠泉女学園大学には創立の翌年から奉職し、27年間、教育と研究に携わってきた。著書は多数あるが、近著は「おひさまのようなママでいて」（幻冬舎、2015）、「増補母性愛神話の罫」（日本評論社、2015）。

最近の主な社会的活動は厚生労働省社会保障審議会委員、同児童部会長、内閣府（前）男女共同参画推進連携会議議長、社会保障制度改革国民会議委員、社会保障制度改革推進会議委員、子ども・子育て会議委員、読売新聞「人生案内」回答者、NHK中央放送番組審議会委員などがある。また、NPO法人あい・ぽーてひろば「あい・ぽーと」の運営と地域の子育てや家族支援者養成に尽力している。

大阪薬科大学



2016年4月、大阪医科大学と大阪薬科大学の法人合併で誕生した学校法人大阪医科薬科大学が設置された大阪薬科大学は、1904年に創立された大阪道修薬学校に源を発する。「昼間業務ノ為メ修業スルコト能ハサル薬業家ノ徒弟ヲシテ夜間薬業ニ関スル必須ナル学科ヲ教授スルヲ目的トスル」を校則に掲げ、薬業界の創始期に、薬種商、売薬業者、製薬業者の店員に広く夜間就学の機会を与えるという使命を担って建学された。その後、昼間に女子部が開講され、

1907年には、「薬剤師」を目指す者のために「須要ナル学科ヲ豫習セシム」と校則を改め、目的を明確にしている。女子部は1925年に我が国最初の女子薬専となる帝国女子薬学専門学校へと発展し、1949年男女共学制の帝国薬学専門学校と改称、翌年「自立した精神を涵養し、深く薬学の知識を授けることにより、豊かな人間性を備えた薬剤師・薬学人を養成し、もって人類の福祉と文化の向上に寄与すること」を建学の精神とし、大阪薬科大学へと昇格、今年で112周年を迎える。現在では、薬学教育年限延長に際し、六年制課程の薬学科と四年制課程の薬科学科を併設し、大学院薬学研究所は薬学専攻博士課程（四年）と薬科学専攻博士前期課程（二年）、薬科学専攻博士後期課程（三年）が設置され、我が国の代表的な薬科大学のひとつとして発展を遂げている。

政田 幹夫



大阪薬科大学学長

学校法人大阪医科薬科大学が設置する大阪薬科大学の政田幹夫学長は、2015年1月に就任して現在に至っている。

政田学長は1949年生まれ。1973年京都大学薬学部卒業、1979年京都大学大学院薬学研究科博士課程修了。1982年城西大学薬学部講師、1985年摂南大学薬学部助教授、1989年京都大学胸部疾患研究所附属病院薬剤部長、1991年福井医科大学附属病院薬剤部

長、1994年福井医科大学教授・薬剤部長、2003年福井大学医学部教授・附属病院薬剤部長（統合による名称変更）を歴任した。専門分野は、臨床薬理学・医薬品情報学・薬剤疫学である。厚生労働省中央薬事審議会副作用被害判定調査部会委員・医道審議会委員、日本医薬品情報学会副理事長、日本薬剤疫学理事、日本病院薬剤師会理事なども歴任してきた。

政田学長は、薬学教育六年制を契機に、薬学教育・研究の在り方に医学・薬学・看護学の専門職連携を取り入れ、薬学教育に「医薬品に対する高度な知識と技術」のみでなく「高い生命倫理観」を持つ事の重要性を唱えている。

学内に将来検討委員会を設置し、臨床薬学教育研究センター・基礎薬学教育研究センターを設立、新しい薬学教育・研究を模索している。

牛渡 淳 仙台白百合女子大学学長。東北大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。博士(教育学)。専門は教育行政学、教育経営学、教師教育学。14より現職。

川島明子 園田学園女子大学学長。九州大学農学部食糧化学工学科卒。博士(農学)。専門は食品衛生学。人間健康学部長、法人評議員などを経て現職。主著『食品衛生学』ほか。

石原賢一 学校法人駿河台学園駿台教育研究所進学情報センター長。駿台予備学校に入職後、学生指導、高校営業、カリキュラム編成を担当後、神戸校舎長を経て、06より現職。

大石 裕 慶應義塾大学法学部教授。博士(法学)。79慶應義塾大学法学部卒、85同大学院法学研究科博士課程単位取得退学。専門は政治コミュニケーション論、ジャーナリズム論。

伊東辰彦 国際基督教大学教養学部長、教授。博士(音楽学)。国際基督教大学人文科学科卒、デューク大学大学院音楽学部博士課程修了(Ph.D.)。

宮下明大 立命館東京キャンパス所長。前立命館大学入学センター次長。キャリアアカウンセラー。高大連携推進室、APU事務局、社会連携部、キャリアセンターなどを経て現職。

小林直毅 法政大学社会学部教授。85法政大学大学院社会科学研究科博士課程満期退学。熊本学園大学社会学部助教教授などを経て、08より現職。専門はメディア文化研究。

矢野眞和 東京工業大学名誉教授。東京工業大学卒。工学博士。国立教育研究所、広島大学助教教授、東京工業大学教授、東京大学教授などを歴任。主著『大学の条件』。

中澤 涉 大阪大学大学院人間科学研究科准教授。03年東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士(教育学)。主著『なぜ日本の公教育費は少ないのか』(勁草書房)など。

豊田眞弓 F P ラウンジ ぱっくすてーじ代表。短大非常勤講師も務める。早稲田大学政治経済学部卒。『50代家計見直し術』(実務教育出版社)など著書多数。

今泉裕美子 法政大学国際文化学部教授。法政大学国際文化学部開設時に着任。2015年度よりS A主任。

内藤政武 学習院長。学習院大学政経学部卒。小田急百貨店常務取締役、日本ホッケー協会副会長、日本オリンピック委員会名誉委員、学校法人学習院理事、常務理事を歴任。

渡部 卓 帝京平成大学現代ライフ学部教授。米国ノースウエスタン大学院卒(M B A)。専門は職場問題と改善コンサルティング。講演や著作など、多数の実績がある。

梅景 正 東京大学環境安全本部・保健センター精神科准教授。東京大学教養学部卒、大阪大学医学部卒、同大学院修了。博士(医学)。精神科専門医。2008年より現職。

米田 博 大阪医科大学医学部教授。79大阪医科大学卒。博士(医学)。97より現職。専門領域は精神医学。

油布佐和子 早稲田大学教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。修士。福岡教育大学教授を経て、'08より現職。主著『現代日本の教師——仕事と役割——』など。

山田政通 拓殖大学副学長、外国語学部教授、国際交流留学生センター長。'00米国 Georgetown 大学院修了。博士（言語学）。専門は語用論、談話分析。

石岡みずき 東京歯科大学歯学部助教。東京歯科大学卒、同大学院修了。群馬県歯科総合衛生センターを経て、'15から東京歯科大学水道橋病院口腔健康科学講座助教、現在に至る。

吉川 茂 阪南大学国際コミュニケーション学部教授。'91関西学院大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。著書『新・自己理解の心理学（共著）』など。

瀧澤義昭 株式会社日本大学事業部営業部次長。日本大学法学部卒。日本大学職員を経て現職。

前田誠史 学校法人西南学院100周年事業推進室長 兼 総務部西南学院史資料センター事務室長。'96西南学院大学文学部卒。

保坂邦夫 昭和女子大学広報部長。同大学入試広報課長、学校法人企画・広報部長を経て現職。

森田隼人 専修大学経営学部卒。2000年にシャボン玉石けん株式会社に入社、2007年に2代目社長である父・光徳の後を継いで代表取締役社長に就任。講演で全国各地や海外をとびまわる一方で、自社の広告に登場したりテレビにも出演するなど、石けんに関する正しい知識の普及に努めている。

川島 葵 フリーアナウンサー。上智大学文学部卒。'05東海ラジオ入社。'12よりフリーとして活動。「TOKYO UPSIDE STATION」（水曜〜金曜）のパーソナリティなどを務める。

〈お断り〉本稿は、お書きいただいた資料から、できる限り統一して掲載いたしました。

- 3月1日(火) 第12回常務理事会に出席
 - 日本私立大学団体連合会「私学振興に関する報道関係各社論説委員等との懇談会」出席
 - 3月15日(火) 第10回理事会・第3回春季総会出席
 - 3月29日(火) 日本私立大学団体連合会・第107回役員会、第77回総会出席
 - 4月19日(火) 第1回常務理事会、第2回理事会出席
 - 4月28日(木) 熊本地震により影響を受けた私立学校への支援を馳浩文部科学大臣などに要望
- 私大連盟を含む各私学団体で構成する全私学連合(代表 清家篤)は、平成28年(2016年)熊本地震で多くの私立学校が被災したことに対して、特に私立学校施設などの災害復旧支援および被災した学生に対する就学支援を国に強く要望した。



馳浩文部科学大臣などに被害状況を説明する
清家篤全私学連合代表

平成28年春の叙勲(連盟事業関係者)

旭日中綬章

渡邊 和子(ノートルダム清心学園理事長・元ノートルダム清心女子大学

学長)

瑞宝中綬章

江夏 健一(早稲田大学名誉教授)

瑞宝中綬章

若林 吉彦(上智大学名誉教授)

その他、熊本地震に対する対応

● 4月22日(金)

熊本地震により影響を受けた学生に対する就職・採用活動について(お願い)

私大連盟および日本私立大学協会が構成する、日本私立大学団体連合会(会長 清家篤)では、平成28年(2016年)熊本地震により影響を受けた学生に対する就職・採用活動について柔軟性を求める要望を、各経済団体をはじめ文部科学大臣、厚生労働大臣に提出した。

お見舞い

熊本地方を震源とした地震により被害を受けられた皆様、関係者の方々に謹んでお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

平成28年(2016年)熊本地震
私立学校寄付金支援ポータルサイト

http://www.shigaku.go.jp/g_shien_kumamoto.htm

日本私立学校振興・共済事業団では、被災した私立学校を支援するため、私立学校の寄付金募集状況を提供しています。皆様のご支援を、よろしくお願い申し上げます。



奇数月20日（年6回）刊行

●WEBサイトにて、全文無料公開中

※第344号（2012年5月発行）から

詳細は

<http://www.shidairen.or.jp/activities/daigakujihou>



第364号（2015年9月発行）

【特集】

特徴ある正課外教育で学生を教育する



【座談会】

4年制私立大学における
看護師養成の未来

【小特集】

エコキャンパスの今

【特別連載】

高校は今～これからの高
大接続・連携を考える
〈横浜市編〉

【インタビュー】

廣田 遥氏
（アテネ・北京オリンピック トランポリン日本代表、阪南大学職員）

第365号（2015年11月発行）

【特別原稿】【座談会】

**『第14回学生生活実態調査』から読み
解く現代学生像とこれからの学生支援**



【小特集】

大学における防災訓練

【インタビュー】

重太 みゆき氏

（印象評論家、インプレッション
トレーナー®）

第366号（2016年1月発行）

【特集】

**それぞれの大学・立場から考える
大学におけるキャリア教育（支援）、とは**



【座談会】

初年次教育の今

【小特集】

留学生へのメンタル/
フィジカルな支援をどう
行うか

【インタビュー】

三上 延氏（小説家）

第367号（2016年3月発行）

【特集】

少人数教育の効果と課題



【座談会】

大学図書館はこれから
どうなるのか？

【インタビュー】

野村 忠宏氏（柔道家）

座談会 「『医師』を育てるとは～医学部教育の現在～」

特集 「選挙と大学はどう向き合うべきか」

小特集 「大学改革とSD義務化」

表紙・大学点描 追手門学院大学 だいがくのたから 東京農業大学

クローズアップインタビュー：

「高橋 尚子さん（スポーツキャスター、マラソン解説者）」

編集後記

◆私は、大学職員になって23年目になる。担当したのは入試や教務、奨学金、図書館。新人のときにコンピュータを少し。どこも窓口の全部署ばかりだ。大学や法人全体を考える立場には縁がない。「大学時報」の編集会議に出て記事の企画を立てるなど、ど

だいな無理がある話なのだ。それでも会議はやっていく。そこで企画の種類を二つに絞ることにした。学生や受験生と窓口で話す様子が目に浮かぶような「現場」を感じられる企画。あるいは、長いスパンの時間で、なるべく突き放して構造的に大学を見る企画。どちらかである。

◆今号特集「高等教育は持続可能なか」は前者であり、後者でもある。経済的に厳しい学生たちの顔は目に浮かぶ。だが、国や社会のために彼ら彼女らの資質が必要なのだから、ただ平等性の観点から「救済」する発想では不足だと思

う。高等教育の未来は、日本社会の未来そのものだ。（広報・情報部門会議〈大学時報〉委員・立教大学図書館学術資料課 木村 健太）

◆「メンタルヘルス」が話題

◆私立大学の質の向上に寄与する」という編集基調のもと、加盟大学、私立大学の特長や実情を発信する誌面作りをしていきたい。

◆「メンタルヘルス」が話題

◆本号座談会では、入試改革についてお話しいただいた。内容はぜひ本誌をお読みいただきたいが、印象的だったフレーズがある。「個人の伸びようとする力」「今いる環境の中で頑張ろうという意志を貫くこと」の重要性。受験生、大学生に限らず、人が成長する過程で大事なことだと受け取った。（日本私立大学連盟事務局 権藤 和代）

◆4月、毎年変わらぬ東京・市ヶ谷の桜並木の下、就職活

◆4月、毎年変わらぬ東京・市ヶ谷の桜並木の下、就職活

◆4月、毎年変わらぬ東京・市ヶ谷の桜並木の下、就職活

